

日本語を母語とする児童生徒の作文調査

—機能語的な副詞の使用に見られる話題の影響—

砂川有里子（筑波大学）

Sunakawa0001@mac.com

【要約】

本稿は、日本語を母語とする児童生徒の学習言語能力評価の指標として、話題の影響を受けにくい機能語的な副詞が利用できるのではないかという予想を立て、「児童・生徒作文コーパス」を用いた機能語的な副詞の学年別使用実態を調査した。その結果、小1から中3までの学年進行に伴い、副詞の異なり語数が着実に増えて行くことが確認できたが、「主観性の強い副詞」と「時間に関わる副詞」は「程度副詞」に比べて話題の影響を受けやすいことが判明した。

1. はじめに

近年、日本在住の外国人児童や日本人の帰国子女、継承語として日本語を学ぶ児童など、日本語を第二言語として学ぶJSL児（Japanese as a Second Languageの児童）が急増し、学校教育におけるJSL児の日本語指導が大きな問題となっている。JSL児の日本語能力は、母語、家庭での使用言語、来日時の年齢、滞日年数など様々な条件により異なっている。そのため、教科学習のための日本語を身に付けさせるには、一人ひとりの日本語能力、特に、教科の学習に欠かせない学習言語能力を正確に把握した上での指導が欠かせない。

JSL児の学習言語能力の判定法については、「外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメントDLA」（文部科学省2014）、「年少者用日本語能力簡易試験（SPOT）」（酒井2018）、「JSLバンドスケール」（川上2020a、2020b）など、様々な研究と開発がなされている。それに対して、日本語が母語の児童生徒（以後「母語児童生徒」と呼ぶ）を対象とした学習言語能力評価については、宮城・今田（2018）がある他は、管見の限りほとんどなされていないのが現状である。

JSL児の場合、日本語習得の最終目標は、同学年の母語児童生徒の学習言語能力を身に付けることにある。そのためには、同学年の母語児童生徒の学習言語能力がどの程度のものであるのか、それを客観的に評価する方法が早急に検討されなければならない。本稿では、母語児童生徒の学習言語能力を評価する指標に成り得るものとして機能語的な副詞に着目する。

2. 機能語的な副詞の調査

2.1 砂川（2023）の問題点

副詞には「生き生き」「テキパキ」「のんびり」など、実質的な意味を表すものの他に、「多分」「あまり」「さすが」など、実質的な意味が薄く機能語的な役割を果たしている副詞がある。中俣ほか（2021）は、品詞ごとの話題に依存する語の割合を調査し、9種の品詞のうち、副詞の話題依存率が最も小さい

ことを報告している。話題の影響を受けにくい語彙であれば、能力判定用の試験が作りやすい。さらに、同じ副詞であっても、機能語的な意味を表す副詞は実質的な意味を表す副詞に比べて話題への依存率はさらに下がるはずである。従って、学年の進行に伴って機能語的な副詞のどのようなものが増えていくのかを明らかにすることにより、機能語的な副詞を母語児童生徒の学習言語能力評価の指標とすることができるのではないかと考えられる。

山内 (2004) は、日本語学習者の話し言葉を集めた「KY コーパス」を用いて4文字のNグラム調査を行い、中級では「はいはい」「ですはい」「ますはい」などの使用が多いこと、上級になるとそれらの使用が減り、代わりに「んですね」「んですよ」「おもうん」などが増えることを報告している。山内 (2004) はさらに、どのレベルに特徴的かを確実に示す形態素があれば、話し言葉のレベル判定の有力な指標となると述べている。本稿は母語児童生徒を対象とするという点で第二言語の学習者を対象とした山内の調査とは異なるが、母語児童生徒の場合でも、各学年で使い始める特徴的な副詞が明らかにできれば、それらの副詞を学習言語能力評価の指標とし、簡便な学習言語能力評価法の開発に貢献できるのではないかと考えている。

この考えのもとに、砂川 (2023) は、「児童・生徒作文コーパス」Ver. 16の機能語的な副詞の調査を実施した。調査の課題は「母語児童生徒の学年に応じた学習言語能力を評価する指標として機能語的な副詞が使えるかどうか」というもので、①程度副詞、②否定と呼応する副詞、③推測・確信・疑念と呼応する副詞、④主観性の強い副詞の4タイプについて、小1～中3の各学年での使用実態を調査した。その結果、母語児童生徒が使用する機能語的な副詞は、どのタイプであっても学年の進行と共に着実に増えることや、副詞のタイプによって使用され始める時期や使用される頻度が異なることなどが確認された。しかし、この調査では、異なる課題の作文を区別せずに調査したこと、学年ごとの人数を統制しなかったこと、同一人物が複数回同じ副詞を使用した場合の影響を考慮しなかったことなど、多くの問題を含むものであった。本稿は、これらの問題を解消するために実施した再調査の報告である。

2.2 再調査のデータ

再調査では砂川 (2023) と同様に「児童・生徒作文コーパス」ver. 16を使用した。このコーパスは、国立大学附属小中学校での3年間(2014年度～16年度)に渡る悉皆調査により構築されたコーパスで、小1から中3までの児童・生徒が書いた「夢」および「頑張ったこと」という2種の課題作文(5,325編、1,644,356形態素)が搭載されている(今田2023)。

「頑張ったこと」作文には勉強や競技などで頑張った体験が書かれており、内容面での統一が見られるが、「夢」作文は、「将来の夢」を書いたものと「寝ている時に見た夢」を書いたものが混在している。作文の時期に多少のズレはあるが、各学年とも基本的には、「夢」が5月の連休明け、「頑張ったこと」が10月頃に書かれている。調査した作文数は、「夢」と「頑張ったこと」のそれぞれが学年あたり180作文(各年度60作文×3年分)、9学年分の総計が1,620作文である。「夢」と「頑張ったこと」を合わせると3,240作文になる。

再調査では以下の2点の課題を設けた。

- I. 「夢」と「頑張ったこと」の作文で、学年ごとの副詞の使用状況に話題の影響があるか。
- II. 母語児童生徒の学年に応じた学習言語能力を評価する指標として機能語的な副詞が使えるか。

再調査で用いたデータの課題別・学年別の形態素数を表 1 に示す。この表に示されているとおり、形態素数は学年進行と共に増えており、中 3 では小 1 の約 3 倍の長さになっている。

表 1 再調査のデータ：課題別・学年別の形態素数

課題／学年	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
夢	17,680	30,586	41,850	54,962	54,966	58,558	60,219	58,098	62,235	439,154
頑張ったこと	24,753	36,271	51,057	58,073	59,447	54,949	59,225	65,853	68,999	478,627
合計	42,433	66,857	92,907	113,035	114,413	113,507	119,444	123,951	131,234	917,781

2.3 再調査の手順

砂川（2023）の調査では、①程度副詞、②否定と呼応する副詞、③推測・確信・疑念と呼応する副詞、④主観性の強い副詞のうち、①程度副詞と④主観性の強い副詞に次のような特徴があることが確認された。

- I. 程度副詞は低学年から高い頻度で使用され始める副詞が多く、高学年でも低学年で使用した副詞と同じものが高い頻度で使われている。
- II. 主観性の強い副詞は低学年から使用され始める副詞が少なく、学年が進行すると共に徐々に使用される副詞が増えていくが、どの学年で使用される副詞も総じて頻度が高くない。

程度副詞と主観性の強い副詞は上に示したような対照的な特徴を示している。そこで、本稿ではこれら 2 タイプの副詞に、砂川（2023）で扱わなかった「時間に関わる副詞」を加えた 3 タイプの副詞について調査を行った。再調査の手順は以下の通りである。

1. 「児童・生徒作文コーパス」 ver. 16 に格納された「夢」と「頑張ったこと」作文のそれぞれについて、調査年度ごとに各学年からランダムに 60 作文を抽出し、3 年分を加算した。この方法で「夢」と「頑張ったこと」のそれぞれについて、1 学年の調査対象を 180 作文に統一した。
2. 「児童・生徒作文コーパス」 ver. 16 に搭載されている Cabocha/UniDic の「形態論データ」を用いて副詞を抽出した。
3. 手順 2 で抽出された副詞の中から程度副詞、主観性の強い副詞、時間に関わる副詞を手作業で選び出した。
4. 以上の 3 タイプに属する副詞のひとつひとつについて、学年ごとの使用者数を調査し、使用者数が 2 以上の数値を採用した。使用者数が 1 の数値を採用しなかったのは、学年進行に伴う副詞の使用パターンと関わりなく、たまたま使われた可能性が使用者数 2 以上の場合より大きいと考えられるからである。

でも学年進行と共に使われなくなる話し言葉的な副詞と、依然として使われ続ける話し言葉的な副詞があることは興味深い。話し言葉的な副詞のうち、どのようなタイプの副詞が学年が進んでも使い続けられるのか、この点についてはさらなる調査が必要である。

次に表2のグレーに塗りつぶされた副詞について検討する。これらの副詞は、どちらかの課題でその副詞の使用者がどの学年でも2名未満（1ないしはゼロ）であったことを示す。各課題で該当する2名未満の副詞は以下の通りである。

「夢」・・・18. たいして、22. いっそう、23 たた、24. ことごとく、28. そこそこ

「頑張ったこと」・・・15. そうとう、19. およそ、21 よほど、25. ごく、26. わりと、27. わずか

これらの副詞は、どちらか一方の作文では使用されているのだが、その場合でも使用者数は多くない。一般に使用されることの少ない副詞だから一方の作文にしか現れなかったのか、話題の影響によって一方の作文にしか現れなかったのか、用例を検討してみたが、はっきりしたことは分からなかった。以下にいくつか例を示す。(1)と(2)は「夢」だけで使用されていたもの、(3)と(4)は「頑張ったこと」だけで使用されていたものである。

(1) そう思うといしゃになるのはそうとうむずかしいと思いました。(小3「夢」)

(2) よほどの夢でないと朝には忘れる。(中2「夢」)

(3) 実際に、私は、陸上部に入部したての頃は、たいして速くはなかったが、毎日コツコツと練習をすることで、とても伸びた。(中1「頑張ったこと」)

(4) 私は厳しい現実と直面したことで、意欲と向上心がより一層高まりました。(中2「頑張ったこと」)

最後に表3を検討する。この表は、それぞれの副詞がどの学年のどの課題のときに初めて使用されたかを示したものである。グレーのセルの[同時期]は当該の副詞が「夢」と「頑張ったこと」作文のどちらでも同じ学年で使われ始めたこと、すなわち、5ヶ月程度早く書かれた「夢」でも、その後書かれた「頑張ったこと」でも、同じ学年でその副詞が使われ始めたことを表す。一方、斜線のセルの[夢]は「夢」のほうが、縦線のセルの[頑張ったこと]は「頑張ったこと」のほうがより低い学年で使われ始めたことを表す。

表3では[同時期]が9件、[夢]が8件、[頑張ったこと]が11件という結果で、「頑張ったこと」のほうに「夢」より低い学年で使われ始めた副詞が多いことが分かる。中でも特に、小1と小2では、[頑張ったこと]が5件あるのに対して[夢]は1件しかない。一方、小3から中3では[頑張ったこと]が6件、[夢]が7件と[夢]のほうが1件多い。ここで注目したいのは、低学年の段階で、「夢」では使われていなかった副詞がその5ヶ月後に書かれた「頑張ったこと」で数多く使われているということである。このことは低学年の時には、短い期間で多くの副詞が使えるようになることを表している。一方、小3以降で[頑張ったこと]と[夢]が僅差であったということは、その段階になると5ヶ月という短期間での副詞の習得は低学年ほど大きくないこと、つまり副詞の習得スピードが落ちることを示している。

3.2 主観性の強い副詞

この節で扱う主観性の強い副詞とは、機能語的な副詞の中で、話し手の主観が特に強く感じられるものである。例えば「やはり」は、「結局」と同様にある結果に至ったことを表すが、「結局」にはない「予想通り」という主観的な気持ちを表している。また、「なるべく」は「できる限り」「可能な限り」と最大限を期待する主観的な気持ちを表している。このように主観的な気持ちが強く表れていると感じられる副詞を、母語児童生徒が使用した副詞の中から筆者の判断で選定した。表4と表5に調査結果を示す。

表4 主観性の強い副詞の学年別使用者数

No	副詞	夢									頑張ったこと								
		小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
1	やはり	2	4	5	15	14	17	16	13	15	4	6	9	12	22	15	13	19	15
2	なるべく		3		3	3		3			2	2	1	2	3	2		3	
3	いよいよ											6	4	4	2	7		2	2
4	さすが							2				2					2	2	
5	いきなり					3	3	3	3	3			4					3	
6	つい						2			3	3		2			5	4	3	
7	ついつい					2						2							
8	とにかく				5	2	6	2	5	4			3	4	2	2	7	9	
9	ひたすら							4			8			2		4	4	9	
10	とりあえず						2		2	3					2	2		2	
11	せっかく					2									2	4			
12	どうせ										2						3	3	
13	あくまで										4					2	2		
14	せめて																2		
15	いまさら																	2	
16	まさか																	2	
17	わざわざ										2								
18	そこそこ																		3

表5 主観性の強い副詞初使用の学年

No	副詞/初出の学年	=同時期									=夢			=頑張ったこと					
		小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	小1	小2	小3	小1	小2	小3			
1	やはり	■																	
2	なるべく		■																
3	いよいよ			■															
4	さすが				■														
5	いきなり					■													
6	つい						■												
7	ついつい							■											
8	とにかく								■										
9	ひたすら									■									
10	とりあえず										■								
11	せっかく											■							
12	どうせ												■						
13	あくまで													■					
14	せめて														■				
15	いまさら															■			
16	まさか																■		
17	わざわざ																	■	
18	そこそこ																		■

表4に見られるように、主観性の強い副詞は、「頑張ったこと」だけで使用されているものが多い。特に「3.いよいよ」は、小2という早い段階から「頑張ったこと」で使用され、その後も継続的に使用が見られるが、「夢」では一度も使用されていない。以下に「いよいよ」が使用された例を示す。

- (5) いよいよ車にのって、しけん会場へしゅっぱつです。(小2「頑張ったこと」)
- (6) いよいよぼくが一番自しんのある六十メートル走です。(小2「頑張ったこと」)

「頑張ったこと」という作文では、この例のように、試合、コンサート、試験などで頑張った体験が語られることが多く、そのことが副詞の使用に影響を与えているものと思われる。上記以外の例でも、「頑張ったこと」の中では、頑張ることの目標や目標の達成を述べた文に「せめて」「いまさら」「まさか」「そこそこ」が使われているが、これらの副詞は「夢」では使用されていない。

- (7) せめて五年生になる前には、後百回できるように練習をしたいです。(小5「頑張ったこと」)
- (8) 今さらながらも、三年生までの短い期間で変わることは可能だと思うのでがんばりたいで

例を観察したところ、目標が達成できたことや競技などの出番を述べるものが多かった。一方、「夢」では、寝ている時に見た夢を話題にした作文の中でわずかに使用されているが、将来の夢を語った作文では使用されていない。このことから、これらの副詞は話題の影響を受けやすい副詞だと言える。以下の(11)(12)に「頑張ったこと」、(13)(14)に「夢」の用例を示す。

- (11) そして、何日かたって、昼休みにあやとびをやると、ついに、できるようになっていました。
(小2「頑張ったこと」)
- (12) とうとう私たち五年生のばんになりました。(小5「頑張ったこと」)
- (13) そのため、僕たちの船は半分になり、ついに沈みました。(中2「夢」)
- (14) でもそこはまっ暗でなにも見えなく、とうとうまいごになってしまった。(小4「夢」)

表7を見ると、小2までの低学年で〔同時期〕が4件、〔頑張ったこと〕が6件、〔夢〕が0件という結果を示している。一方、小3以降では〔頑張ったこと〕が2件、〔夢〕が4件と低い学年で使い始めた副詞は「夢」のほうが多くなっている。既に述べたように「頑張ったこと」は「夢」よりも5ヶ月程度後の時期に書いている。このことから時間に関わる副詞は程度副詞の場合と同様に、小1から小2の間の短期間に多くの副詞が習得されるが、小3以降は副詞の習得スピードが落ちることを示している。

4. まとめ

本稿では、小1から中3までの母語児童生徒による「夢」と「頑張ったこと」という課題作文を用いて機能語的な副詞の使用実態を調査した。対象としたのは①程度副詞、②主観性の強い副詞、③時間に関わる副詞の3タイプで、調査の課題は以下の2点である。

- I. 「夢」と「頑張ったこと」の作文で、学年ごとの副詞の使用状況に話題の影響があるか。
- II. 母語児童生徒の学年に応じた学習言語能力を評価する指標として機能語的な副詞が使えるか。

Iの課題に関しては、副詞のタイプによって話題の影響の有無が異なることが確認された。すなわち、程度副詞の場合は話題の影響が認められなかったが、主観性の強い副詞と時間に関わる副詞では話題の影響が認められた。特に「頑張ったこと」では、「競技への出場」「勝つための練習」「自分の実力の程度」「目標の達成」といった内容が語られる際に、「夢」では用いられない、「いよいよ」「ついに」「とうとう」「せめて」「いまさら」「まさか」「そこそこ」といった副詞が用いられていた。

副詞は品詞の中で最も話題の影響を受けにくいと言われ、その中でもさらに機能語的な副詞は話題の影響を受けにくいと考えられる。このような副詞であっても、話題の影響が避けられないタイプのあることが判明した。

IIの課題に関しては、話題の影響を受けにくく、かつ、低学年から数多くの語彙が高い頻度で使用され、その後も着実に語彙が増える程度副詞が、学習言語能力を評価する指標の候補として有力のように思われる。しかし、今回の調査は「夢」と「頑張ったこと」という課題の生活作文に限られている。程度副詞が他の課題の生活作文や生活作文とは異なるジャンルの作文でも話題の影響を受けにくいものであるのかについて、さらには、生活作文、意見文、感想文といった異なるジャンルで用いられる副

詞に違いがあるかといった点について、さらに調査を重ねる必要がある。また、今回は調査の対象としなかった否定と呼応する副詞や、推測・確信・疑念と呼応する副詞、あるいは接続詞的な副詞、さらには接続詞についても同様の調査を行い、話題の影響を受けにくい機能語やジャンルごとに特徴的な機能語を特定する作業が必要である。

機能語的な副詞や接続詞が学習言語能力の指標となりうるかどうか、この結論を出すにはまだ長い道のりが控えている。しかし、副詞や接続詞は数が多く、さらに試験問題が作りやすいという利点がある。指標となり得る語彙の特定ができれば、学習言語能力の簡便な評価法の開発に大きく貢献するだろうと思われる。

参考文献

- 今田水穂 (2023) 「作文コーパスの用途と設計について」『日本語文法学会第 24 回大会発表予稿集』 pp. 187-191.
- 川上郁雄 (2020a) 『JSL バンドスケール【小学校編】-子どもの日本語の発達段階を把握し、ことばの実践を考えるために-』明石書店
- 川上郁雄 (2020b) 『JSL バンドスケール【中学・高校編】-子どもの日本語の発達段階を把握し、ことばの実践を考えるために-』明石書店
- 酒井たか子 (2018) 「多言語背景の児童を対象とした多層分岐適応型日本語力診断オンラインテストの開発」『科学研究費助成事業研究成果報告書 (課題番号 25284092)』
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-25284092/25284092seika.pdf> (2024 年 1 月 9 日)
- 砂川有里子 (2023) 「機能語的な副詞の調査-母語話者児童生徒と第二言語学習者の比較-」『日本語文法学会第 24 回大会発表予稿集』 pp. 203-207.
- 中俣尚己・小口悠紀子・小西円・建石始・堀内仁 (2021) 「自然会話コーパスを基にした『話題別日本語語彙表』」『計量国語学』 33(3), pp. 194-204.
- 宮城信・今田水穂 (2018) 「『児童・生徒作文コーパス』を用いた漢字使用能力の発達過程の分析」『計量国語学』 31(5), pp. 352-369.
- 文部科学省 (2014) 『外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA』
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/1345413.htm (2024 年 1 月 9 日)
- 山内博之 (2004) 「語彙習得研究の方法—茶筌と N グラム統計—」『第二言語としての日本語の習得研究』 7, pp. 141-162.

付記

本稿は、JSPS 科研費 20H01674 (研究代表者: 宮城信) の研究の一部である。草稿の段階で有益なコメントを下された宮城信氏に感謝します。